



新しい。美しい。暖かい。11月は伝統的工芸品月間

伝統の 小田原漆器

室町時代中期に箱根山系の豊富な木材を使用し、木地挽きされた器物に漆を塗ったのが始まりといわれています。その後、北条早雲より第3代、北条氏康が小田原漆器を発展させるため塗師を城下に招き、彩漆塗の技法も用いるようになりました。江戸時代には盆、椀などの日用品の他に武具類にも漆を塗るようになり、江戸時代中期には継続的に実用漆器として江戸へ出荷するなど、箱根関所を要する東海道屈指の城下町、宿場町として漆器づくり技術が確立されました。小田原漆器の特徴はケヤキ材などが持つ自然の木目の美しさを充分生かした摺り漆塗や木地呂塗が主体であります。昭和59年5月、通商産業大臣より「伝統的工芸品」として指定を受けました。



もっと知りたい、小田原漆器のこと。



Q&A



A **Q**

生産額ほどのくらいなの？

工業製品は機械で作るので、同じ物を早くたくさん作ることができます。伝統的工芸品は主に手作りなので、同じ物をたくさん作るには時間がかかりますが、新しい形や模様のもを早く作ったり、ひとつだけの注文生産ができるのです。伝統的工芸品の一年間の生産額は、平成十年の調べで合計二千七百億円を越えています。

伝統的工芸品は日本各地で作られています。その数は平成十年の調べではおよそ一一〇〇の工芸品があることがわかっています。そのうち、国の指定を受けている工芸品は全国に一九三あります。数が多いのは織物や人形や玩具で、各地でさまざまなものが作られています。また、箱根寄木細工や小田原漆器、鎌倉彫など、生産地の名前がついているものが多いので、一目でどこで作られたかがわかります。

A **Q**

全部合わせていくんです？

昔から伝わる技術やいろいろなやり方で、職人さんが作りあげたもの、それが伝統的工芸品です。材料は自然にある物を使い、作り方の基本は百年以上前からずっと続いていきます。伝統的工芸品は、できあがりの美しさや使いやすさで昔から親しまれ、愛されてきました。そして今でも多くの人がびとに使われ、私たちの生活になくてはならない大切なものになっています。

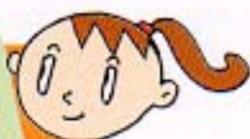
A **Q**

伝統的工芸品ってなに？

昔から伝わる技術やいろいろなやり方で、職人さんが作りあげたもの、それが伝統的工芸品です。材料は自然にある物を使い、作り方の基本は百年以上前からずっと続いていきます。伝統的工芸品は、できあがりの美しさや使いやすさで昔から親しまれ、愛されてきました。そして今でも多くの人がびとに使われ、私たちの生活になくてはならない大切なものになっています。

小田原漆器

Q&A



Q どの地域で生産されているの
が？

A 小田原地域が主な生産地です。

Q 材料はどこから買うか？

A 日本全国からですが、主に関東・東北地方と
静岡県から買っています。



Q どんな道具をつかうか？

A ろくろ機械をつかって木材を回転させ、製品
の形に合わせた手作りのさまざまな刃物をつ
かって切削し、形を成形します。ろくろをつ
かって木材を加工するのが挽物技術です。漆
は刷毛や篋（へら）をつかって塗ります。

すりうるしぬり
摺り漆塗り



Q いつからつくっているか？

A 室町時代の中期（およそ500年前）といわれ
ています。

Q 何人ぐらいでつくっているか？

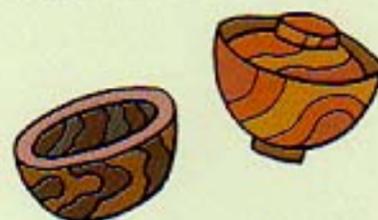
A およそ70人です。

Q どんな材料をつかうか？

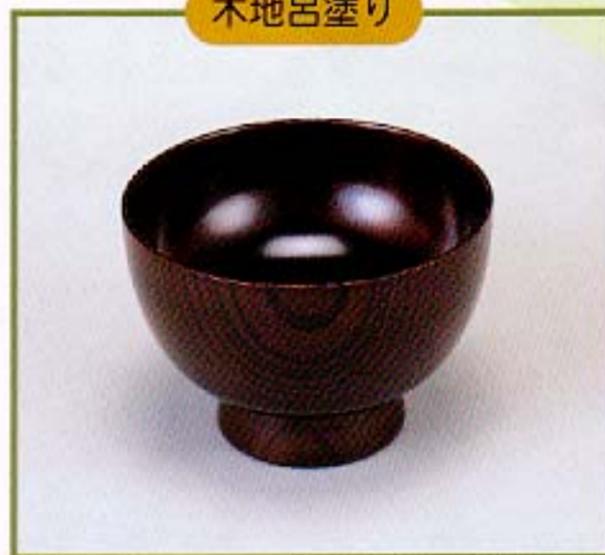
A 木地はケヤキ、セン、クワ、トチなどです。

Q 特徴は何か？

A 小田原漆器の塗りには、摺り漆塗と呼ばれる
塗り方と、木地呂塗りと呼ばれる漆塗りの
技術で、木地の木目が透けて見え、天然材そ
のものの製品と感じられるのが特徴です。



きじろぬり
木地呂塗り



Q なぜ小田原地方で小田原漆器が盛んになったのか？

- A**
- 箱根・伊豆地方にはたくさんの良質な材料（木材）がありました。
 - ものをつくる職人さん（ろくろで木地をつくる人）が定住していました。
 - 全国から漆職人さんが小田原城をつくるために集まってきました。
 - 東海道箱根関所、小田原の宿、箱根温泉のにぎわいがある、実用的な小田原漆器としてつくられるようになりました。



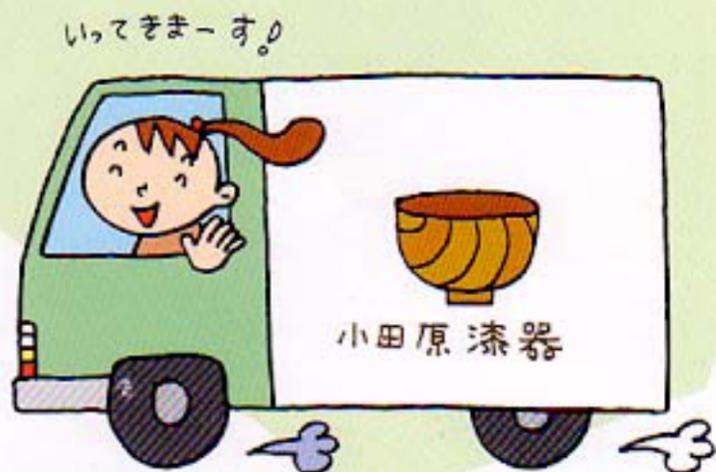
Q 伝統を守るのにどんな努力をしているか？

- A**
- 職人になるには長い年月が必要です。人によって違いますが、およそ10年かかると言われていています。ですから若い時から技術を習わないと伝統技術の習得は難しいのです。組合では伝統工芸技術を守るために、後継者の育成や技術研修会を開いたり、常に新製品の開発研究に努力しています。



Q 製品の販売先はどこか？

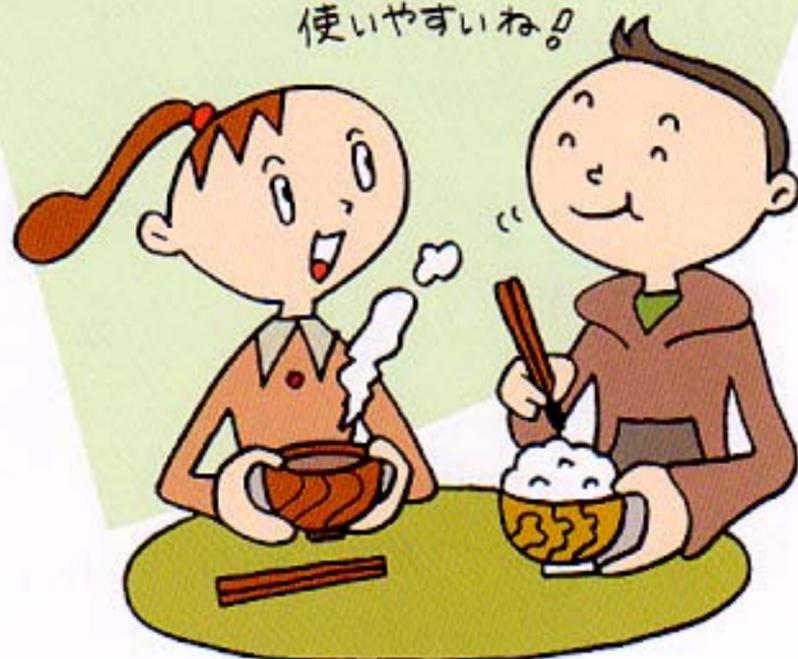
- A** 日本全国です。



Q 手づくりの良さとはなにが？

- A**
- 小田原漆器をつくるのに、おおがかりな機械やロボット工作機械などは使いません。手づくりは、つくる人の手や感覚が基本になっています。物を使う人の手も同じ大きさですから、しっくりなじむのです。使いやすい大きさ、形、仕組みなど、使う人の便利なように考えながらつくられるところが、手づくりの良いところでしょう。

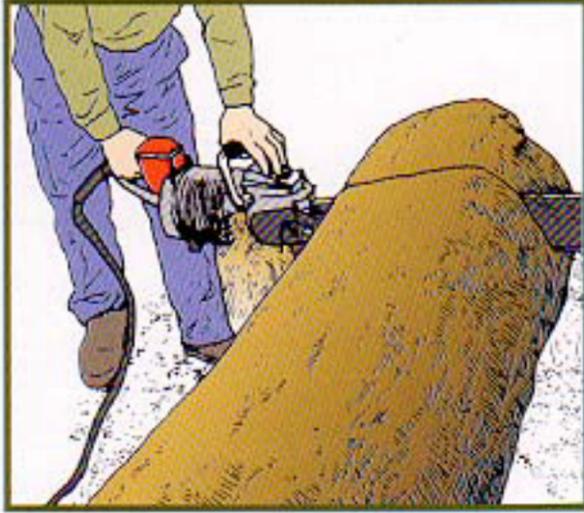
木のぬくもりがある、使いやすいね♪



Q 小田原漆器のつくり方で難しいところはどこか？

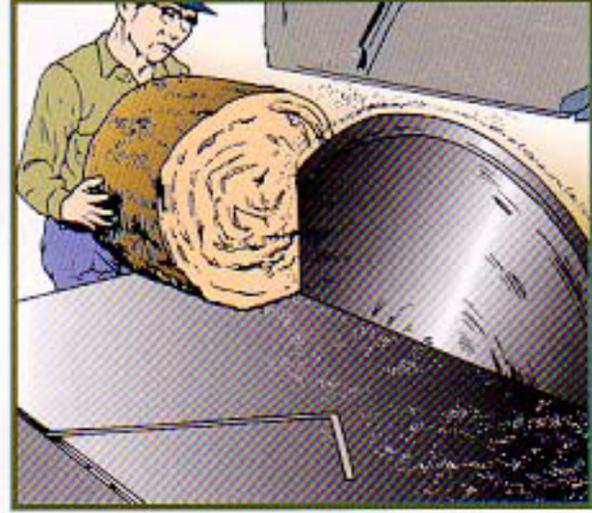
- A**
- ろくろの技術や漆塗りの技術はもちろんですが、狂いのない材料であるかの選び方、十分材料を乾燥させること、使いやすい形に作ること、丈夫にきれいに塗ること、危険なところがないようにつくることなども難しいところです。

1



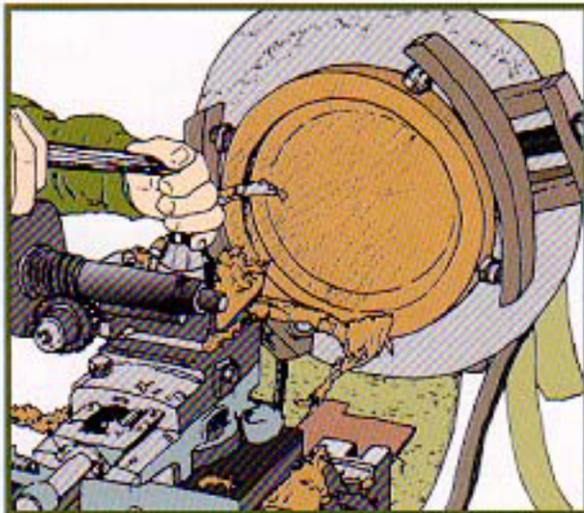
原木を製品に応じた寸法に切断する。

2



木口面を基準にして墨付けをし、丸のこ盤で挽き割りをする。

3



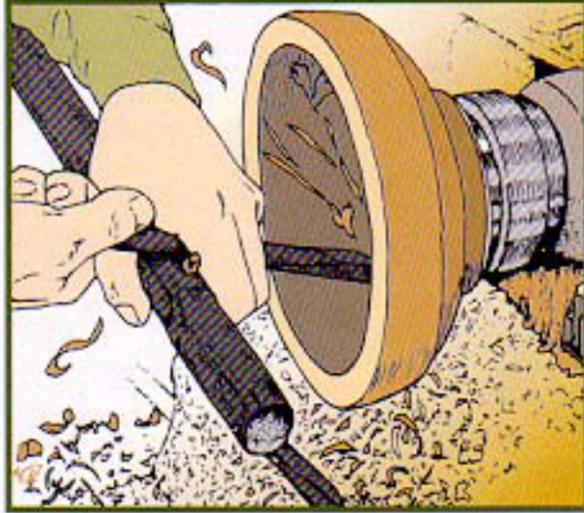
保持爪にしっかり固定し、粗挽き作業をする。

4



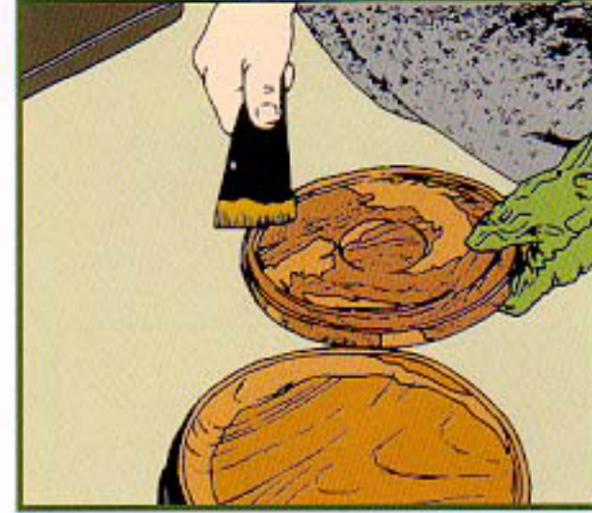
粗挽き加工後、薫煙乾燥機で乾燥させる。

5



ろくろ機械で木地加工をする。

6



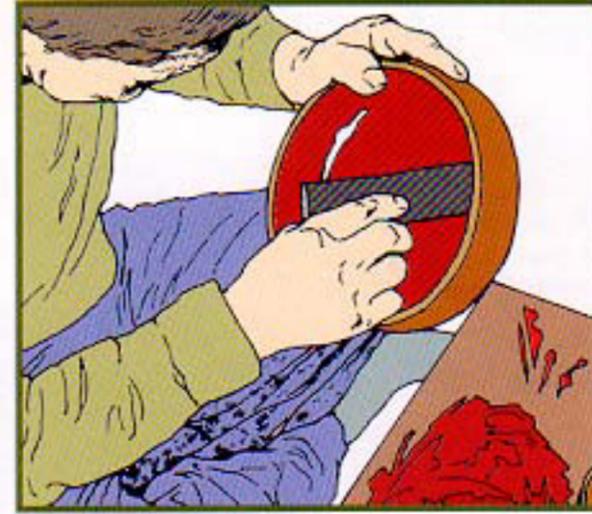
生漆をヘラもしくは刷毛を用いて、漆を吸い込ませる。

7



生漆をすり込んで拭きあげる。この工程を6~7回繰り返す。

8



木地呂塗り、漆刷毛を用いて上塗りをし、乾燥風呂に入れて乾燥させる。